
青春あっとまーく

未獅 メル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青春あつとまーく

【Nコード】

N3109BA

【作者名】

未獅 メル

【あらすじ】

マイペースで特徴という特徴が茶髪、眼鏡の夕児。勉強運動全てにおいて優秀な

夕児の彼女の絢芽。クールに見えるが毒舌な茶髪ロングの1つ上の元生徒会長、杏子。陸上一筋で、カブトムシが大好きな黒髪短髪少年の啓。ラーメン屋の家業を受け継いだ引き籠り元高校生で店主の楓菜。1人のことが大切で、でもその1人のことをみんなが同じ気持ちで考えていた。何か足りない僕たちの青春。部活でも勉強でも恋愛でもない。

その空白を埋めるために僕たちは青春を取り戻そうと奮闘する、
それが僕たちのかけがえのない日常での青春記である――

prologue 01 (前書き)

高校生同士の会話ということもあり、下ネタが多少あります。
拒否反応があるかたはお戻り下さい。
感想、評価随時お待ちしております。

prologue 01

「おはよ夕児君！」

真夏、それはお天道様が容赦なく照りつける時期のこと。

高校2年生、それは自由と言う身勝手な翼を生やす時期のこと。

彼女、それは非リア充者からみたらなんともふしだらな存在のこと。
幼馴染み、それは恋をしまつてもしょうがない対象のこと（異性対象）。

勇者、それは朝っぱらから同じ高校に通う彼女と2人で出歩き非難を浴びても

恥じない根性の事である。以上が僕の心の中のワード検索で引かかるもの達。

要するに高校2年の夏に、僕は、幼馴染みの異性を彼女にして歩いているリアル充実した人間と言うこと。あまり調子に乗ると、思わず表情に出るので注意しておこう。

「夕児君……鼻伸ばして何か良いことあったの？」思わず表情に出ていた。

綺麗なその紅潮気味の頬を膨らませて、小動物のようなつぶらな瞳で訴えるような物言い。思わずキュンときた……って違う。

「僕は鼻なんか伸ばしてないよ」

「……」

何故に無言。なぜ思い当たる節は特段無いけど。とくだん佐倉さんは何を不満に思ったのか、子供向け人形のような愛らしい顔立ちで、こう口にしたのだ。

「ワタシじゃ、やっぱ興奮しないの？」爆弾投下。

「ちよ、えつと……え?!」

思わず佐倉さんの等身大を凝視。言い方が可笑しいかもしれぬがそのぐらい焦っている。僕たちの通う高校の女子指定制服の紺色のセーラーの上には白いカーディガン。スカートはブルーチェック

……ってそんなのは知っている。動揺しすぎて意味無いのに制服解説、僕はどこぞの変態だ。

一步二歩と近寄ってくる佐倉さんの履いているロンファ。心霊現象とか思わないで欲しい。純粹に寄ってくるのだ、それも何かを誘っているように……。

僕の顎に右手を添えて、撫でまわす彼女の行動までに達する頃には身体はお互いに密着している状態。バカ、興奮しない訳ない！

後ずさりで一歩下がる僕。通学路ということもあって、他の同じ学校の生徒達も通るがざわめきが聞こえる。「リア充死ね」「爆ぜろ」「絢芽さんに誘って貰うとか死んでしまえ」さがつまゆうじ実に理不尽である。

ちなみに佐倉さんの名前は佐倉絢芽で僕は吾妻夕児。五人のいやらしい口の妻が夕方に女兒を連れて、という覚え方は非常に覚えづらいのでやめて下さい。

「逃げた！ お仕置きだべえ」

背中に白い両腕が優しく触れて、胸元に佐倉さんの顔が埋まる。彼女は僕の胸元で頭を擦りつけて、「この感じが夕児君だよね」との感想。僕の彼女は実に腐女子的な捉え方をするのである。

「――将来の自分について」

終業式であろう日の1時間目にこんな道徳的授業を受けさせるとは教師もさぞ御苦労様などと思ってしまう。教室につくなり、「遅刻だぞ吾妻絢芽」と担任からからかわれて席に着く。窓側というのは結構光合成には持って来い、などのクラスメイトの理由から僕と佐倉さんは一番後ろの窓側の席。ここはここで居心地が良いんだ。まあ、僕は哺乳類。

「ねえねえ、夕児君」

隣では相変わらず、のほほんとしたテンポでのペン回しが行われている。グライダーが得意と豪語してただけあるという感想はまた次の機会。

「何、佐倉さん？」

「結婚する前に子供が欲しい？ それとも結婚後？」

結婚前提のお付き合いでしたっけ？ 告白した側は情けなく佐倉さん側なのだが。

「……後者で」

「へえ……いくじなし」

あれ？ おかしい。実におかしい。最後の方の言葉に耳を疑った。

「い、今なんと」

「なんでもないっ」

純粹に真っ黒のセミショートをどこぞのCMのようになびかせてそっぽを向いてしまった。僕が悪いのか分らないが耳が仄かに赤みを帯びていた。恥ずかしいワードだったのだろうか。

「ところで」そっぽを向いた状態で佐倉さんはそんな前置きを置く。

「今日も一緒に帰ろうねっ」

誠に元気いっぱい少女である。

暑苦しい体育館で、気付いたら予鈴が鳴り終業式は幕を閉じた。

全校生徒600人超えの我が高校は出入り口に1年生が居るのに3年生から退場をしていく。まあ、これが社会って奴だ、と担任は馬鹿笑いしながら言う。ちなみに担任は見た目、ゴリラ。中身、エリートゴリラである。ゴリラから変わって無いって？ 知ってしまった世界と知らないままの世界だったら前者より後者、という言葉を生んだ我が陸上部部長が憤慨してしまうから、敢えて理由は述べない。

「2年D組、前から退場」

学年主任から掛け声が耳に入り、体育館を後にした僕は、ステージ側の出入り口手前の黒のセミショートの佐倉さんが目に入る。やや紅潮したような頬。目が泳いでいることを察すると……悪友からの入れ知恵をされたと、見る。そのまま佐倉さんは挙動不審にこちらへと寄ってくる。白いカーディガンの両裾まで握っている……。

「ゆ、ゆう……じ、く、君っ」

「なんでしょうか……」

今朝のように身体と身体が気泡を生まない程の密着感。高揚してくる心臓音。僕の首に白いカーディガンをまとった両腕が交差する。右足を一步引くと佐倉さんの左足が一步入り込んでくる。視線を佐倉さんの顔に向けると、目を瞑^{つむ}っている。

「……付き合って1ヶ月だし、そのね、き、キスなんかはどうでしょうか……」

口の動きがゆっくりして見えてしまう。自分で気付くのは恥ずかしいけど、息が荒くなってしまうている自分がみっともなく思える。さあ、行こう！ とでも言うかのように顔が近づいてくる。この人に羞恥というものは無いのか！

「ちよちよっ——」

「ドルフィンキックっ!!」と体育館の中から大声が聞こえ、一層注目を集めた刹那、僕の右横腹が——見事なボディラインを描いた。

——記憶がある限り、うつすら見た『生徒会室』というプレートを見た気がした。ああ、僕の記憶は何処へ。

目を覚まして第一に目にしたのは苺のような粒の黒い斑点が疎^{まば}らになっている白い天井、という訳では無く佐倉さんの寝顔であった。人は寝がえりを打つというが漫画的超展開だと天井が王道であろう。あるいは妹。そんな中、僕は彼女の寝顔。

やった、僕リア充！ という裏世界の首領^{ドン}にドーンと銃で撃たれて……、

「どーんっ！」

「ぐほっ！」

否応なく身体は宙に浮いて、奇妙な？字の出来あがりって違うわ。背中をソファーに沈着させ、咽^{むせ}てから上半身を起き上がらせる。僕の真っ正面には茶のロングの髪の毛で前髪をパツン。黒タイツを履いている人間だかなんだかよく分からない女生徒が腕組みをして、

こちらを見下すように見ている。

「どう？ 気持ちよかった？ あたし、パンチには自信あるの、パンチに」

「パンチをそんなに強調するな！ というか愉快犯かよ！ それに気持ちよくなってるない、どこの変態だよっ」

「一気にツッコミを入れるなんて強欲なのね、さすがあたしの下僕」
「聞き捨てならない台詞がひよいひよい耳に入ってはデリートするこっちの見にもなれ」

「年上にそんな態度。下僕以外だったら……」

「なんだよ、最後まで言えよ！ 気になるじゃないかよ……嘘です。ごめんなさい。仰っていただけませんかでしょうか？」

「宜しい下僕。でも言わない」

「僕の無駄な努力を返してくれっ」

「ところで」

「どうした」

「はあ」

ああ、生徒会室から見える景色は綺麗だな、とかでも思っているのだろうか、この女。いや、この女に関しては、はるまっあんず春松杏子に関しては、そんな悠著な考えをせずに物事を素直に言う女であって……、

「佐倉絢芽とセクロスした？」

「アア、キコエナイ。」

「したのね。ふしだら、気持ち悪い。近寄るなエイズ野郎」

酷い言いようだ。春松杏子、この女は1つ年上の元生徒会長であって、古くからの付き合いがある。佐倉さんよりも昔からで。まあ、こういう変な古くからの付き合いを腐れ縁というものであって、口の悪い姉みたいなものだ。一応、佐倉さんとはそういう関係は無いと、否定を入れておく。

「まあ、どうせしてないでしょ？ あなた、早漏だから」

「アア、キコエナイ。というか、黙れ変態」

危うく他の役員はいない……。春松はさっき説明したが『元』生

徒会長。何があっても今ではただの一生徒にすぎない。ところが春松は生徒会室で書記の手伝い、書類整理を手伝いに来ている。ここまで固執する意味なんて聞いても、「貢献するって素敵だと、思わない方が頭湧いてる」などと説教交じりの理論を2時間弱訊かされるからな。

「学生のうちにセクロスした方が良いわよ。制服と私服だと、制服の方が社会から束縛されたって気分で燃え上がるから」

「勝手な自論を口にするなよ。お願いだからその話から脱線してくれ」

はあ、と疲れてしまった僕は再びソファーに背中を預けて、天井が目にはやけて見える。

「ねえ」

と聞こえた春松の声は枯れた喉から絞り出した感覚で、多少驚いてしまう。上半身を起こ上がらせ、僕の目に移ったのは枯れ果てた木のように立っている春松の姿。顔がしおれて、お婆ちゃんのような容姿……。

「み、水頂戴。あなたの小便でも良いわ」

「はしたない。ちょっと待ってろ——」

——ゾンビ人間、とでも説明しようか迷う。

春松は普通の人間じゃない。なんて超展開期待でもさせてる訳ではない。

難病、不治の病、と捉えた方が早い。無駄に明るい太陽に身体を照らされると、体力の消耗、細胞分裂の活性化などが原因となって、老いぼれた姿になってしまいうらしい。そのために水分を欲しがり、さっき言ったように小便でも構わず口にしないとそのまま、生き悶えて死んでいく、という不謹慎と分かっているが厨二病設定の病気である。日陰を欲するあたりから病名は「ゾンビ化」。僕が名付けた病名……だ。

「水、持ってきた」

生徒会室のドアを開けてると、ドア手前で佐倉さんが本気で怖がっているのか、僕を半泣き、上目遣いで見て、リアルに飛び跳ねる。その勢いで僕の顔面には白黒のマグカップの中に入った水が勢いよく掛り、嫌な視線を感じる……。

「夕児……君？」

「み、水！」

「きゃああ!!」

彼女たちの声が入り混じり、混乱する中、左頬に生温かい感覚が……。

犬が水を舐め取るような音と一緒に、「下僕、悪いけど、我慢しろ。お前が気絶するよりあたしが死んだ方が色々問題だろ?」と冷静、と言うより冷徹な声が耳を突き通る。

棒立ち状態な僕に佐倉さんは「ちょ、ちょ……へえ?!」と困惑するような顔を向けて奇声を発して……実に混沌とした空間になってしまった。

「何やってんだ、お前ら？」

「ああ、僕の悪友の声が天から聞こえてくる。待つてよパトラッシュ」

「お前が待つて、夕児」

春松（通常モード）に舌で舐められている僕の右肩にごっつい手が置かれる。

「そして俺は悪友じゃなくて、友達である、岩崎啓だ」

防臭剤特有の匂いが鼻をくすぐってくれたおかげ、とでも言うか冷静沈着になり、導かれた結果、春松の右頬に軽くビンタ。

「お、悪い」

素っ頓狂な声を上げるかと思えば、春松は冷静にセーラーの裾で唇を拭き始める。なんなんだ……。

「生徒会室に呼ばれたと思えば……夕児は春先輩に舌で舐められて

るし、佐倉は半泣きしてるし、俺が京都で買ってきたマグカップは真っ二つだし、俺帰るわ」

「「拗ねた?!」」

「す、拗ねてねえーし! それに春先輩と夕兎ハモるなっ」

「いや、お前拗ねてるだろ」

「下僕の言うとおりだ」誰が下僕だ。

「分かった。拗ねた、これで良いだろ? 俺部活あるから行くね。

行くからねっ」

「「めんどくせえー奴」」

「そこだけはハモらないで! 結構精神ダメージ大きいよっ」

「んでだ」「俺、流された?」

春松の勝手なまとめフェイズだ。近くのソファに腰を降ろして、彼女は口パクを試みせた。

「……おしっこいきたい?」

「おい、下僕。本棚に身体を圧縮されるか、食堂のおばちゃんに肉厚プレスを掛けてもらうか選択肢をやろう。死ね」

最終的に死ぬのね、僕。春松はどうとう足を組み始めて「9、8、7」とカウントをし出す。どういう状況か理解できてない僕に圧力をかけるように、春松の蹴りが弁慶に入り、蹲る。^{つずくま}

「痛っ。何するんだよ」

「黙れヘタレ。いや茶髪眼鏡」

リアルな特徴を上げられた。

「校則違反の貴様に問題を授けてやったんだ、感謝しろ変態茶髪眼鏡」

特徴の前に大雑把に変態をつけられたどくん。春松も十分校則違反だけだね。

「いやいや、分からないですよ（ツツコミを入れるところとかも）」

「しょーがない」

そんなことを口にして、佐倉さんを手招きで呼び、耳打ちを始める。

「さあ、絢芽。あたしの口パクを正解出来たら、結婚の約束をして貰えるように下僕の印鑑等入ったこの水色のPOCHを授けよう」

「アア、キコエナイ。ってやめっ！」

「えっと、『下僕、生徒会長の候補にあがれ』……」

小拍子の拍手を送る鬼女^{きじよ}、春松は何故かドヤ顔。そして、水色のPOCHが授与ってどうなってるんだ、僕の家之母さんの管理状態は！……あれ？

「正解だ絢芽」

「ちょっと待った！ え？ なんで？」

「ご、ごめんね夕児君」

「いやいやいや、佐倉さんが謝ることじゃないよ。問題は――」

「正解されてしまった」

「春松、ちゃちゃいれるな！ それにさりげなく問題発言したよね！」

「黙れ、恥ずかしがり屋。いや、間違った童貞の恥ずかしがり屋」
容量変わらねえー！ じゃねえーよ！

「夕児君……童貞なの？」

「ちょっと春松、なんで彼女の前で凄いことカミングアウトしてるの？」

「夕児、お前経験人数居ないのか……俺はお前の10倍は経験してるぞ」

「啓、お前、無理するな。顔が悲しげな表情になってるからね！」

0×10って結局、0だからな、馬鹿なお前に言っとくけど」

「岩崎、お前も童貞か。童貞菌が繁殖するから手を洗ってうがいしてこい、トイレで」

「場所限定?!」

もう、どーにでもなれ。その場に項垂^{うなだ}れるように座り込み、時々聞こえる、

「立つんだジョー！」は、もうツツコミを入れる気力さえ出なかった。

帰りの帰路へは珍しく、僕と佐倉さんと春松と啓。あの後、啓は部活動に顔を出しに行き、僕たちは生徒会の手伝いをしていた。日が沈んでいく太陽をバックに歩く僕達は何故か、青春をしている気分である。学生としての本望は、勉強して、部活して、恋愛して、三者均等に出来てこそ青春なのだが、今の僕たちは謎の優越感に浸っていた、そう思っているのから青春と感じてしまうのではないか、などと思う。

「そういえば最近、『狩りに行こうぜ!』を耳にしないわね」

「流行が過ぎればそんなものじゃないのか?」

春松の疑問を僕はなんとなく、返答。

「流行が過ぎればってどこの現代人だ」ここのです。

「そもそもだ、流行が過ぎれば次の流行が来るなんて、いつまでも思ってるからいけないってあたしは思う。例えば世間の流れにでもあたしはあたしの自己流で生きて行く、なんていう精神が、みんな無いんだ」

「春松は逆にそういう精神はあるの?」

「そういう思いに向けての向上心はある。故に恋愛に関しては一筋だ」

「ワタシも恋愛にも勉強にも一筋です!」思わぬ伏兵。

春松は苦笑いして、「絢芽は恋愛に関しては本当に一筋なんだよな」などと語る。

「小さい頃、あたしと下僕が一緒に居る時でも割って入ってくる程だったからな。絢芽を大事に出来ないなら、下僕、貴様を断罪するからな」

どこぞのRPGの世界の剣士の発言だ。モブキャラに居そうだな。

「大事にする」

「ゆ、夕兎君、恥ずかしいよお」

「おい、ピンク色のところ悪いんだが俺の存在無視しないで」

「聞こえたら負けな」

春松なりの接し方というものだろうか、それとも友達間で良くある、変な発言すると空気化してしまうアレなのか？ 目の前で始めて見た。

「そういえば、勇者って勇ましい者ってことだから……」

「あたしを指差したら、丁寧に逆に折りたたむぞ」ある意味殺人予告。

「え、ワタシ？ 勇ましくなくて可憐だよっ」自分で可憐とか言うな。

「あ、俺？ 下半身が勇ましいよ」僕もだ。

誰ひとりとして勇ましい者など見つからないが、ここだけの話、一番勇ましい者は佐倉さんでは？ という僕の心の中での疑問。昔に遡るのだが――

秘密基地と称してコンテナの後ろにある四角い空間でカブトムシを啓が持ってきた日であった。

「カブトムシ！？ ボク無理だよ」

「だっせえ夕児」

「やめてあげてよ啓君」

「いやいや、絢芽。岩崎の言うとおり、男でカブトムシ持てないは、乙女系男子ね」

「乙女、啓、男子？ 啓君っておねえーちゃんなの？」

「誰がおねえーちゃんだ！ 俺は男だ！」

「はいはい、分かった。絢芽も夕児のカッコいいところみたいよね？」

「うん！」

「ボクはカッコよくなくなくて良いもん！」

「絢芽は見たいらしいわよ？」

「ボクは主観でも客観でも見たくない」

「小学6年が難しい言葉使うわね。早く掴まないとあたしの下僕にするわよ？」

「げぼく？」

「良いから掴みなさい！」

「やだよお！」

「掴まないと夕児の部屋にあるお宝本、全部、夕児のお母さんには
らすわよ」

「もう絢芽と啓にその時点ではれてるって」

「良いから掴みなさい！」

「やだ！」

「……早くしろ」

「あ、はい……ゴキブリみたっ——痛っ！」

「次言ったら、俺の拳が脳天に行くからな」

「もお、やだ！」

「逃げたら絢芽に嫌われるぞ夕児」

「そうだぞ。逃げたら俺の拳——」

「あんたは黙ってなさい」

「痛っ！！ バカ！！ 阿呆！！ うんこ！！」

「……黙れ」

「はい……」

「夕児君頑張れ！」

「ほら、黄色い声援。掴めなかったらカブトムシを叩きつぶすぞ……」

……冗談だ、岩崎」

「冗談に聞こえ——痛っ！」

「冗談だ」

「はい……」

「ほら、行け夕児」

「無理！」

「仕方ないなあ……絢芽、悪いんだが夕児にお手本見せてあげろ」

「うん、わかった」

「よし、お利口だ」

「……自分で掴めな——痛っ！」

「なんか言ったか岩崎？ ああ？」

「……なんでもないです」

「ほら、夕児君。掴めたよ」

「凄いけどゴキブリみた——待って春松に啓、何構えてるのって痛っ！」

「「恥じろバカ者」」

——懐かしき記憶である。多分後世にも覚えていそうな内容である。今だからこそ笑えるが当時にしたら、どれだけ佐倉さんが勇敢な人に見えたか。

「そうだ、この時期と言えば、カブトムシだな」

背中に滴る謎の汗。俗に言う冷や汗。嫌な所を突いてくるのは昔から啓の良い所であって悪い所だ。何故、頭で回想し終わってから言うかな。

「そうだな。あのときは絢芽、かなり凄かったもんな」

「そ、そうなの？ ワタシはあの時以来、ゴキブリに耐性ついて、佐倉家のゴキブリハンターっていう異名付いたよ」汚名の間違えである。

「凄いなそれ。それに比べて下僕は……」

「みんな、そんな哀れんだ目で見えるなっ」

「今どうなんだ？ 絢芽が彼女になったんだから触れるよな？ 結婚してまでもゴキブリハンターやらせるつもりか？」
結

「凄い職名なところはスルーして、何故に結婚話。まあ、これもスルー。」

「やらせないって。さすがに、僕が頑張るよ」

「なんか科学的前進だね、夕児君」

「おちよくっていらっしゃるのか君たちは。」

「まあ、まあね。アハハ」

「やっぱ、今も昔も女って強いな」

「どうした啓。春松と佐倉さんの前だと僕達人権無いの知らなかつ

たのか？」

「いや、知ってた」

「わ、ワタシは夕児君に人権売ったつもりだよ！」売るな。

「今頃ケチつけるなら肉の皮捲れるまで狩るぞ」こっちはまた殺人予告だ。

「結論的にいうと誰しも可愛い女の子には討伐期があるのよ！」

佐倉さんらしからぬ発言。討伐期ってなんだよ。討伐の基準を教えてください。このまま行くと僕たちはその討伐の対象だ。

「今にしては、絢芽の討伐の対象は夕児だな」

「えへへ、夕児君優しいし、カッコいいからね」

きゃー嬉しいを棒読みで繰り返していいですか？ 恥ずかしいけど嬉しい、中途半端な感覚を味わうのは久しぶりだ。佐倉さんにはつこりと満面の笑みで僕をみつめて、両頬を紅潮させる。白い肌であるために非常に赤くなっているのが窺えて、こっちまで、赤面をしているように錯覚してしまう。事実、そうなのだ。

「下僕、照れたら第3の目を覚醒させるぞ」

あれ、おかしいなあ。僕のロンファが微動だに出来ない程、圧縮されている。おまけに馬鹿みたいに痛い。目線を下にやると見事に足を踏まれている。

「佐倉さんにこんなこと言われたら、僕だって恥ずかしくなるよ」

「あ、ご、ごめんね」

「佐倉さんが謝る義理は無いよ」

「強気だな、下僕」一捻^ねじり入り、足の指達が分離してしまうのは？ なんて思ってしまったが気のせいだ。

「そういえば、春松」

「なんだ童貞下僕」

「やめて、変な四字熟語みたいなの」

「分かった変態童貞下僕」

天下の女子高生様、ましてや『元』生徒会長様の口からこんな発言。特殊性癖の人間ならば喜びそうだが僕は違う。ノーマル、まし

てや彼女が居る。

「本題に移るとする。なんでキスするときドルフィンキックしてきただんだ？」

水中の中でやって頂きたいものだ。春松は両手で掴んだスクールバックを顔まで、持ってきて隠してから弁慶蹴り。

「痛っ!!！」

「喋るな阿呆！ 下僕のくせい！ 下僕のくせい！ バカ!!！」

気付くと僕はロンファーを精一杯踏まれていた。

「じゃ、気を付けて。絢芽、下僕に襲われても誘いに乗るなよ。学生は清く、正しく、真っ当な道を選ぶべきだ」

なんて言って春松と啓とは住宅街の中にあるのれんが黄ばんでいて、貫禄あるラーメン屋っぽい、ラーメンオクザキの店の前で分かれの言葉を告げて帰って行った。襲われそうなのは僕の方である。

「佐倉さん、このまま帰る？」

「えっとね、ラーメンオクザキ寄る！」

「そうこなくちゃね」

高校生2年目の終業式の日、僕と佐倉さんはやはり友人感覚であって、恋人感覚にまで僕の方が発展しそうにない、そんな気がしてしまった。やはり、この空白が開いている感覚は恋愛事なのであるうか……。

prologue 01 (後書き)

推敲出来ていない文なので怪しい場所（全体的に怪しいのだけでも）を見つけては

訂正させていただきます。推敲出来てないなら、載せるなよ！ つて言われても仕方ありません。承知の上で公表させていただきます。感想・評価随時お待ちしております。

あとがきまでよんで戴いた一読者様に感謝申し上げます。

prologue 2

物語っていた――ラーメン屋ラーメンオクザキの店前ののれんだ。それは貫禄のある汚れ具合で（油污れのような）、オクザキの『ザ』が見事に消えて、『オクサキ』になっている。いや、奥崎だから、あまり支障は無いと思うが。

僕と黒のセミショートが目印の佐倉さんは、住宅街の中にある、ラーメンオクザキの店前で、我が高校の『元』生徒会長の春松と悪友の陸上部部長・啓と別れてから、ラーメンオクザキへと入店。

この店は信じられ難いことなのだが、店主が『元』女子高生。元女子高生と言っても僕と同じ高校2年、それも今春に中退したばかりの。現在17歳で店を1人で切り盛りしているとか。

「いらっしやい……」

威勢の良い挨拶が飛んでくる。そのまま会釈して、カウンター席まで足を運んだ。

「珍しい客と思えば夕児っちと……佐倉さんじゃないですか」
今、あからさまにやる気をなくした表情を目にしたぞ。

「ひ、久しぶり楓菜……佐倉さん?!」

「ワタシと夕児君の仲だもん」

佐倉さんの両手が僕の左腕に当てられている。わざわざ喧嘩売りに着たのか佐倉さんよ……。

「ご来店ありがとうございます。帰り道は回れ右でお願いいたしますね、バカップル」

奥崎楓菜、ラーメンオクザキの3代目。地元高校に通っているせいでもあるのか、楓菜も幼馴染み。はっきり言う僕、佐倉さん、春松、啓、楓菜は小さい頃からずっと一緒に遊んでいて、昔の馴染めから今も時々、こうして出会ったりする。佐倉さんと楓菜は、僕達が付き合う1か月前までは普通に仲が良かった気がするが……、僕の勘違いだろうか。

「楓菜、そんなにツンツンして……デレないの——嘘です、ごめんなさい」

思いつきりガンを飛ばしてくる楓菜に太刀打ち出来ないのも僕のポジションというね。

「良い、夕児っち。君のせいだからね」

「え？」

「え、じゃない！ え、で済ませるな！ バカ！ 阿呆！ うんこ！」

まるつきり春松に殴られた啓のような発言。仮にも女の子がこんな台詞を吐いちゃ行けないと思う。そんな言葉に流れてなのか、おたまがその金属性を活かして、僕のおでこへ、コンっという音を立てて狙撃。

「痛っ、僕のせい、なの？」

理不尽なやつあたりだと思うのだが。おでこを右手で擦りながら訊く。

「そう、夕児っちのせいなの！」

「なんで？」おたまがおでこへと再び弧を描き飛んできた。

「なんでもなの！」

「ちよっと、夕児君に何するの……痛っ」横に居た佐倉さんへおたまが命中。

「お、落ち着いて楓菜と佐倉さん！」

「ガルルルッ！！」なんて言ってそんな楓菜の顔の表情と、憤慨している面持ちの佐倉さん。そんな中に牽制けんせい入れるなんて、野球で言う満塁のときに一塁に不意に牽制してしまう投手のようだ。リトルでもそんなことしないと思うが。

「なくにやってんの、幼馴染み同士で」

そんなどうしようもない状況を打破する、鶴のなか一声。カウンター席から覗ける厨房（カウンター席、前で作らないタイプの部屋作りをされている）から、紺の無地の半袖とサイドプリーツスカートの20代後半のような女性が顔を覗かせる。

「黒木さん、聞いて」2人で何、ハモっているのやら。

「佐倉がね！」

「フウがね！」

「2人で一斉に喋り出すな」

長ったらしい金髪の髪の毛を、腕にあった水色のシュシュでポニーテールにして、ポケットからはPLAINISSIMO petiと描かれた赤い長方形の煙草を取り出して、某夢の国のキャラクターが描かれたライターを片手に一本の煙草に対して火を付けて、一吹き。

「ふー、本当にお前ら女子高生なのか？」確かに小学生みたいなやり取り。

「楓菜は元女子高生だもん」無い胸を張って言うな。

「ワタシは夕児君が教育係兼彼氏という点から高校生だもん」

いや、僕がロリコンみたいな感じだよな。

「分かった分かった」

めんどくさそうに煙草の先端を灰皿に擦り付けて、黒木さんと呼ばれる女性はポニーの部分で左右に揺らしながら仕事場へと戻って行く。さすが大人の女性。

「とりあえずカウンター席、座って話しな」と奥から聞こえ、渋々座る佐倉さん。僕も仕方なく佐倉さんの隣に座り、落ち着いたかと思いきや、「ちょ！」と佐倉さんが唸り声を上げる。少々驚いたのは秘密。

「店主であるフウが夕児君の隣に座る意味なんだけど」

人形のように白い肌を持つ佐倉さんは頬を膨らまして、再び楓菜に牽制。それをかわすように「夕児っち、学校どうなの？」と話題を変える。巧みだ。

「ええっと、前よりは楽しくなったかな」

僕の両弁慶が佐倉さんと楓菜によって蹴り上げられる。軽く痣になっ

「痛っ、ええっと……前よりつまらなくなったかな」

「楓菜が居ないから？ まあ、楓菜がいないと寂しいよね！」

弁慶が佐倉さんの足によって、再び蹴りを頂く。脛蹴り過ぎだぞ……。楓菜はにっこりと小悪魔フェイスでこちらの顔を覗いてくる。改めてみると楓菜、髪を染めたのか黒になって、ショートボブ。明らかに大人の女性とを感じる。

「えっと、僕は佐倉さんがいたら十分だから——えっと楓菜もいないと」

頭の中がこんがらがり、遂にカウンターにおでこを付けて蹲る。

もうこの人たち自己主張激しすぎる。そんな僕を彼女達は「「ヘタレ」」とハモる。生きててごめんなさい。生まれ変わったら貝になりたい。

「そういえば」

「なによヘタレ」

「どうしたの夕見君。まだ帰らないよ？ 決着付いてないし」なんのですか。

僕は頭を起して、深呼吸。少しの空白を取り、

「どうして楓菜は学校やめたんだ？」

そんなことを口にしてみる。前々から気になっていたんだよな。

佐倉さんもそれが気になったのか、その茶色い綺麗な瞳で楓菜を凝視。

「……ラーメン屋を継ぎただけだよ」

頬づえをついて、そっぽを向いて楓菜はそう言うが、僕には中々考えられないことだ。現に店主をしているのだが、学校やめてまで職を継いだのはどうしてだろうか。そして、ここに来たのはそんなことを訊きたいわけであって、本題へ突入した。

「そうか……、僕と佐倉さんは今日、それを訊きたかっただけなんだ」

だが、ここでこれ以上訊くのは楓菜を攻めているようで、嫌だからやめておく。楓菜は肩の力が入っていたのか、肩をがっくり落として、大きな欠伸をした。

「そう、今日は楓菜、眠いから帰って」

出入り口を指差され、帰れの指示。タイミング良くお客、2名がやってきて、

「黒木さん、お客来たから材料裏倉庫から出してきて」と厨房に叫び、楓菜は、

「じゃあね、夕児君、佐倉」

とだけ言って、「いらっしやいませ」とお客さんにいつもの威勢で接客。

大人しく、その指示に従い、店を出た僕達を待っていたのは楓菜と僕達の心の中を表すかのような、小ぶりの雨がパラパラと降ってきていた――

雨ということもあり、僕の家も近い、そして今日から夏休み、という点から佐倉さんは今日一日、一泊を

僕の家ですることになった。成り行き上だから誰にも文句が言えないことが非常にデメリット。だが、彼女として家に向かい入れたのは初めてであって、友達として部屋に入れた回数は数え切れないほどだ。他の奴も僕の部屋に勝手に居たり、寝たり、ゲームしたりと好き放題なことをしてくれてた。

6畳半の部屋で和室。部屋を開けると奥の方に純白と言っても良いようなベット。右手側には押入れ。左手側には押入れ。ここに友人たちへ長年の因縁をつけても良いって思える程の無数の穴。佐倉さんと僕は唯一、穴をあけていないコンビである。無論、母さんに叱られたのは僕である。

「夕児君のお部屋変わってないね」

「佐倉さんが僕の部屋に入ったのは告白してくれた前日の日だし……」

「そ、そうだったね！ あ、あまり……その、恥ずかしいから告白とか……言わないで」

僕の横で挙動不審にモジモジとしている佐倉さん。ときどき目が

合って上目遣いで、その綺麗な瞳でみつけてくる。可愛い、が素直な感情。

「ごめん」と、一言謝罪の言葉。そこから自分の部屋の戸をあけて、「好きなところに座って」と、やや緊張した面持ちで言ってしまった。そんなに緊張して、僕は何を意識しているのだろうか。

頷いて佐倉さんは真ん中に置いてある正四角形とは呼びづらい机を目の前に座る。僕はというと、手軽に飲み物を冷蔵庫から取り出す。一応、お客様だ。

「あ、どこ行くの？」

腰を降ろしたばかりの佐倉さんは急いで立ち上がり、僕の元へやってきた。不思議そうにみつめてくるが飲み物を取りに行くだけ、なのだが。

「飲み物取ってくるだけだよ」

「わかった。その間、えっちな本、みつけたらどうしたらいいかな？」

「大人しく座ってなさい！」

「あるんだ」

「うっ……」

だめだ。彼女に観念して、そういう系の本の場所を教えるしかなかったのだ。暫くしたのか、よく分からないが飲み物を溢してタイムロスしていることは承知なのだが、自分の部屋へとやや早歩きで向かってしまう。

「ごめん、遅れて」

そんな台詞を吐くや否や、佐倉さんの思わぬ赤面をしている表情に、背中に妙に冷たい汗がゆっくりと下降していく。佐倉さんの視ている雑誌は、今さっき居場所公開をしたそういう系の本。ちよつと待って。さっきダンボールに入れて押入れに……って押入れ開いてるよ、チクショー。何してるんだ、僕の彼女は！ 佐倉さんは僕と目線が合うなり、男子中学生がお母さんにそういう系の本がバレたときみたいに、必死にそういう系の本を背中に隠して、しらんぷ

りをしている。

「えっと……佐倉、さん」

「な、何かな！　べ、別に夕兎君がニーハイソックスにこだわる変態マニアだ、とか勝手に勘違いしている訳じゃなくて……」

「見たこと認めるのね！」

「ご、ごめんなさい。わ、ワタシは……胸小さいし、身長小さいし、お尻小さくて安産な身体じゃないけど……頑張れるから」何をですか。

「だから、今夜！　頑張ってみようかなって……」だから何をですか。

「え、えっと」

コップ2つを持つ僕はやや動揺していたのか何を言葉にすればいいのか、分からなかった結果、口が、口が勝手にこう言った。

「楓菜の、ことなんだけどね！」

話題変更と言うわけだ。佐倉さんはあからさまに呆けた顔になり、こちらを凝視。

「……いくじなし」

グサリ、心臓を抉りだす勢いで追加ダメージが……自分でいくじなし、というのは理解できているからここはスルー推奨と言うわけだ。

「親御さんはすでに亡くなっていて、祖父母の方もいないわけであるのラーメン屋を切り盛りしている訳だよな」

「そうだよ。小さい頃はワタシや夕兎君、みんなでお店の手伝いしてたわね」

コップを1つは佐倉さんに、1つは自分のへと区別して、机に置き、佐倉さんの真っ正面へと座る。

さっきのテンションとは違い、落ち付いたのか楓菜のことになると饒舌になるのか分からないがいきなり、口数が増えた。

「そうだね、丁度10年前に、親御さんは他界。1ヶ月前には佐倉さんと付き合いだしてから、なんか佐倉さんと楓菜は仲が悪くなっ

てるし……」

タブーだったのか、佐倉さんのつま先が僕の足の裏に当たる。牽制ね。

「原因は夕児君にあるとか言ってたけど、ワタシに十分あると思うの」

「どうして？」いきなり子供向け人形のような白い頬が熱を帯びてきたのか、紅潮を始めて、机を彼女は突然、両手をグーにして叩く。いきなりの物音に小さくなる僕。

「どうしてもなにも、ワタシが悪いの！ これ以上の質疑は愚問だよ、夕児君」

どうしてだろうか、どうして？ と聞くと誰も答えてくれないのは……。

「ねえねえ、夕児君？」

就眠に着こうと電気を切り、佐倉さんがベットの上でこう聞いてきた。

「明日、遊園地行こう。夏休み前の嫌な思い出は消しにさ」

僕は否定する材料がない為、「良いよ」と軽く返事をして、眠りに着いた。質問をしてきた彼女の声は、どうしても忘れられない出来事を思い出してしまったような、弱気な声であった。

僕と彼女の青春のページはまだ何も書き足されていないで、まだ時間だけが刻々と進んでいく感覚であった――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3109ba/>

青春あっとまーく

2012年1月9日20時46分発行